

日本語の情報収集の談話の展開方法

— 大学生と留学生による就職活動の相談の談話を対象に —

Analysis development of discourse on consultation of job hunting by university and foreign students

小林友美
KOBAYASHI Tomomi

〔要旨〕

本研究の目的は、情報収集活動の一種である相談の談話を対象に、日本語の情報収集の談話の展開方法を明らかにすることである。参加者の発話機能の用いられ方と談話構造を分析観点に、母語場面と日韓の接触場面の談話を分析した。その結果、学習者の質問者は、主に発話機能の〈Ⅲ. 要求〉の発話を用いて情報収集をするのに対し、母語話者は、〈Ⅲ. 要求〉以外に〈Ⅳ. 提供〉や〈Ⅴ. 受容〉で情報提供や反応をしながら、相互作用の顕著な談話展開をすることが明らかになった。また、談話構造は、「大話段」の数と提出順は共通しているが、「話段」の出現数と提出順は異なった。母語話者は、大小の話段からなる多重構造が展開し、一つの話題において、発話を重ねて掘り下げる談話の展開方法を取るのに対し、学習者は、「質問」と「応答」の単一の発話連鎖から形成される話段が多く、「質問-応答」を繰り返す談話展開の方法を取る傾向があることを明らかにした。

Key word: 情報収集、相談、談話の展開方法、接触場面、質問



1. 本研究の目的

本研究は、日本語の会話教育に応用するための基盤的研究として、就職活動の相談の談話を対象に、日本語の情報収集の談話の展開方法について解明するものである。本研究の「情報収集の談話」とは、何らかの目的で、ある情報を必要とする質問者が、それに関する情報を有する応答者に対し、必要な情報を口頭で得るという一連のコミュニケーション過程のことである。本研究では、大学生¹⁾である日本語母語話者と留学生²⁾である日本語学習者が質問者の場合を設定し、情報収集をする際の質問者の役割に焦点を当てて分析をする。

口頭による情報収集は、「質問」と「応答」により必要な情報が獲得できるものから、「質問」と「応答」のみならず、限られた時間内に、やりとりから情報を得るものまで多種多様である。後者の質問者は、応答者に応じて臨機応変に対応するなど様々な技術が必要となり、実際の場面では、目標達成に向けて様々な情報を求め、相手の情報を理解した上で、さらに情報収集を進めるという談話展開をしている。そのため、より複雑な談話構造や、質問表現をはじめとする様々な口頭表現の運用の習得が不可欠である。しかし、授業では、教師の発問と学習者の解答というやりとりが多く、質問すること自体を学習する機会が少ないように見受けられる。また、筆者は、韓国人日本語学習者の日本語教育に携わる機会が多く、会話授業のインタビュー活動において、「質問」と「応答」を繰り返す談話展開や唐突な話題転換、話題が十分に発展できず、会話が続かないという問題が生じたため、どのように学習すれば、改善できるのかについて考えることがあった。

そこで、本研究では、情報収集活動の一種である相談の談話を対象に、日本語の情報収集の談話の展開方法を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

日本語の談話の構造分析をしたザトラウスキー（1993）は、「発話機能」に基づく勧誘の談話を対象に、参加者の異なる談話の目的や「発話機能」の使用の違いから、「話段」を区分した。「話段」とは、音声言語最大の単位である「談話」の直接的成分として、また、「談話」と「発話」の中間的単位として、佐久間（1987）により提唱された言語単位である。市川（1978）が文章の成分とする「文段」に対し、佐久間（1987：103）は、「文段の概念の必要性は、話し言葉の文章構造を対象とする際により重要なものとなる」と指摘し、談話における「話段」の多重構造を論じた。本研究でも、「発話機能」の組み合わせから、「話段」を認定する。

情報収集の談話に関する先行研究には、初対面の母語話者場面と接触場面を分析した佐々木（1998）、話段開始部で用いられていた質問表現を分析した中井（2003）等がある。それらは「自由会話」が分析対象なのに対し、本研究は、質問者と応答者の役割が明確な談話が対象であるため、参加者別の特徴に相違があると予想し、より詳細な分析結果を出すことを目的とする。また、

鈴木（2003, 2009）は、ラジオの相談番組と図書館レファレンスでの母語場面での相談を分析対象に、「機能文型」に基づく「談話型」を解明した。本研究も同様、相談の談話を分析対象としているが、本研究の参加者は、同年代同士の自然談話であるため、鈴木（2003, 2009）と相違がある結果が予想される。

韓国語母語話者を対象にした情報収集の談話の先行研究には、梅木（2009）、高木（2013）等がある。梅木（2009）は、「日本人と韓国人の自由会話8組」を対象に分析し、「日本人は主に自ら情報を提供する発話により会話を展開させるのに対し、韓国人は自らの情報を提供する発話と情報要求を重ねる発話の両方を同程度用いる」ことを明らかにした。また、高木（2013）は、日本語と韓国語の自然談話を分析し、「日本語では『共有型』、韓国語では『要求型』の談話展開が多く現れる」ことを明らかにしている。談話の種類は異なるものの、本研究も、韓国語母語話者を対象とするため、同様の発話連鎖や談話展開が観察される可能性があるという仮説を立てた。

3. 研究方法

3.1 談話資料の収集方法と調査手順

本研究は、日本語の母語場面の【資料1】～【資料8】の8資料と、日韓の接触場面の【資料9】～【資料16】の8資料からなる全16資料（各資料約15分間、全16資料約4時間）の就職活動の相談の談話を対象にする。表1に談話資料の概要を示す。調査協力者は、応答者である就職活動経験者の4年生と、質問者である就職活動中の主に3年生である。場面設定の理由は、2点ある。第1に、最近、日本企業への就職を希望する日本語学習者が増加傾向にあるため、日本語の会話教育に応用できることにある。就職活動では、企業説明会や、OB・OG訪問で情報収集をする機会も多い。そのため、日本語教育へ有益な提案ができると考えた。第2に、就職活動は、大学生にとって重要な活動であり、実際に起こり得る場面であるため、談話の参加者の動機が高く、より自然な談話を収集できるのではないかと考えたためである。

調査協力者は、応答者である日本語母語話者2名³⁾（男性、応答者Fと応答者N）、質問者である日本語母語話者8名（男女各4名、NS1～NS8）と日本で就職活動をしている韓国人上級日本語学習者8名（男女各4名、NNS1～NNS8）である。本研究は、質問者の役割に焦点を当てるため、応答者を2名に限定し、各応答者、8名の質問者と会話をしてもらった。

学習者の国籍と日本語レベルは、条件を揃える目的と筆者の教育経験により設定した。会話は1対1形式の初対面のペアで、応答者には質問者の氏名を、質問者には応答者の氏名、学部、内定した企業の業種について事前に知らせておいた。

表1 談話資料の概要

| 資料番号 | 応答者（就職活動経験者の大学生） | | | 質問者（就職活動中の大学生と留学生） | | | |
|--------|------------------|-----|----|--------------------|-------|-----|----|
| 【資料1】 | 応答者 F | 4年生 | 男性 | NS1 | 質問者 K | 3年生 | 男性 |
| 【資料2】 | | | | NS2 | 質問者 O | 3年生 | 男性 |
| 【資料3】 | | | | NS3 | 質問者 T | 3年生 | 女性 |
| 【資料4】 | | | | NS4 | 質問者 K | 3年生 | 女性 |
| 【資料9】 | | | | NNS1 | 質問者 K | 3年生 | 男性 |
| 【資料10】 | | | | NNS2 | 質問者 H | 3年生 | 男性 |
| 【資料11】 | | | | NNS3 | 質問者 B | 4年生 | 女性 |
| 【資料12】 | | | | NNS4 | 質問者 S | 3年生 | 女性 |
| 【資料5】 | 応答者 N | 4年生 | 男性 | NS5 | 質問者 Y | 3年生 | 男性 |
| 【資料6】 | | | | NS6 | 質問者 I | 3年生 | 男性 |
| 【資料7】 | | | | NS7 | 質問者 S | 3年生 | 女性 |
| 【資料8】 | | | | NS8 | 質問者 H | 3年生 | 女性 |
| 【資料13】 | | | | NNS5 | 質問者 U | 3年生 | 男性 |
| 【資料14】 | | | | NNS6 | 質問者 C | 3年生 | 男性 |
| 【資料15】 | | | | NNS7 | 質問者 M | 3年生 | 女性 |
| 【資料16】 | | | | NNS8 | 質問者 J | 1年生 | 女性 |

調査⁴⁾は2012年12月22日と26日に実施した。質問者には、事前に、「15分間でできる質問を順番に箇条書きにして、メモを用意する」よう指示し、調査当日は、「メモ通りではなく、臨機応変に対応しても構わない」という指示をした。不自然さを避けるために、応答者には質問者の質問内容は伝えず、「就職活動について質問されるので、15分間話してください」と指示をした。各質問者には、相談の目的を強化するために、会話終了後、聞いて分かったことをワークシートにまとめてもらった。また、応答者には、会話終了後、チェックリスト⁵⁾に質問者の評価を5段階でしてもらい、後日、フォローアップインタビューをした。以上の手順で調査を実施し、談話を収集⁶⁾した。

3.2 分析方法

分析観点は、参加者の発話機能の用いられ方と談話構造の2点である。参加者の発話機能の用いられ方を明らかにするため、ザトラウスキー（1993）の「発話機能」を再分類した鈴木（2003, 2009）の「発話機能」を一部修正した表2の全5類39種の分類を用いた。本研究の談話資料の発話の名称に相応しいことから、〈IV 1. 事実説明〉、〈IV 2. 見解表明〉、〈IV 3. 評価表明〉は鈴木（2003）に従っている。

表 2 本研究における「発話機能」の分類全 5 類 39 種

| | | |
|------------|--------------|------|
| I. 注目要求 | | |
| II. 談話表示 | | |
| A 話題開始機能 | | |
| a1 話を始める機能 | a2 話を再び始める機能 | |
| B 話題継続機能 | | |
| b1 話を重ねる機能 | b2 話を深める機能 | |
| b3 話を進める機能 | b4 話をうながす機能 | |
| b5 話を戻す機能 | b6 話をはさむ機能 | |
| b7 話をそらす機能 | b8 話をさえぎる機能 | |
| b9 話を変える機能 | b10 話をまとめる機能 | |
| C 話題終了機能 | | |
| c1 話を終える機能 | c2 話を一応終える機能 | |
| III. 要求 | | |
| 1 確認要求 | 2 判定要求 | |
| 3 選択要求 | 4 説明要求 | |
| 5 単独行為要求 | 6 共同行為要求 | |
| 7 言い直し要求 | | |
| IV. 提供 | | |
| 1 事実説明* | 2 見解表明* | |
| 3 評価表明* | 4 意志表明 | |
| 5 選択情報提供 | 6 言い直し | |
| 7 応答 | | |
| V. 受容 | | |
| 1 関係作り・儀礼 | 2 自己注目表示 | |
| 3 相手への注目表示 | | |
| a 継続 | b 承認 | c 否認 |
| d 確認 | e 興味 | f 共感 |
| g 終了 | h 同意 | |

(注*印は、鈴木 (2003) に従う。「II. 談話表示」の下位項目 14 種は、佐久間 (2002) の「接続表現の文脈展開機能」による。

全発話を分類し、参加者別の「発話機能」の出現傾向を分析する。また、「発話機能」の組み合わせと内容上のまとめり、参加者の目的をもとに、「話段」を認定し、その結果から、談話構造を明らかにする。以上の 2 点を分析観点に、就職活動の相談の談話を分析する。

4. 分析結果

4.1 参加者別の発話機能の出現傾向

表 3 には、母語場面の全 8 資料の参加者別発話総数と発話機能総数、表 4 には、接触場面の全

8資料の参加者別発話総数と発話機能数を、それぞれ示した。

表3と表4によると、母語場面の発話総数は4,421発話、接触場面は4,094発話で、母語話者のほうが発話機能を多く使用している。参加者別にみると、母語場面は、発話機能総数4,421発話のうち、質問者が2,009発話(45.4%)で、応答者が2,412発話(54.6%)である。接触場面は、発話総数4,094発話のうち、質問者が1,830発話(44.7%)、応答者が2,264発話(55.3%)で、いずれも応答者の方がやや多い。これは質問者と応答者の参加者の目的によるものであろう。

種類別に分けた発話機能種類別合計を見ると、母語話者と学習者の発話機能数は同等である。

質問者の発話機能数は、まず、〈II. 談話表示〉で、母語話者と学習者で差があるのは、〈話を変える機能〉と〈話をまとめる機能〉である。〈話を変える機能〉は、母語話者が12発話で、学習者が3発話だった。また、〈話をまとめる機能〉は、母語話者が7機能で、学習者が1機能だった。つまり、母語話者が〈II. 談話表示〉を用いて話題展開をしていることがわかる。

〈III. 要求〉では、母語話者の質問者の〈確認要求〉が81発話、学習者が67発話で若干母語話者が多い。母語話者は、〈確認要求〉を用いて、応答者の応答を確認しながら、談話を展開していると考えられる。また、〈IV. 提供〉では、母語話者の〈見解表明〉が197発話、学習者が93発話で100以上も差がある。また、〈評価表明〉も、母語話者が43発話で、学習者は半数の23発話である。このことから、母語話者は、〈III. 要求〉を用いた発話で質問をするだけでなく、〈IV. 提供〉を用いた発話で自分の情報を提供したり、応答に対する感想を言ったりして積極的に会話に参加していると言える。これは、梅木(2009)の結果と類似している。

〈V. 受容〉では、下位分類10種の分類を別に見ると、母語話者の〈興味〉が160発話、〈共感〉が49発話である。学習者は、〈興味〉が84発話、〈共感〉が8発話で大差が見られた。母語話者は、〈興味〉や〈共感〉を用いた発話で、応答者に反応をしている。

以上のことから、母語話者と学習者は、発話機能数は同等だが、発話機能の用いられ方が異なるということが分かった。質問をするという質問者の役割を担うにも関わらず、母語話者は、〈III. 要求〉の発話機能以外に、〈II. 談話表示〉で話題を進行させ、積極的に発話権を取って話題を展開させている。また、〈IV. 提供〉で自分の情報や共通の話題を提示したり、〈V. 受容〉の〈興味〉、〈共感〉の発話により、相手の発話に反応しながら、相互作用の顕著な談話展開をしているのである。

一方、学習者は、〈III. 要求〉系の〈説明要求〉と〈判定要求〉を用いた発話で、応答者に質問をすることに重きが置かれている。母語話者より、〈確認要求〉で応答確認をする発話や、〈IV. 提供〉と〈V. 受容〉の発話が少ないのである。〈VI. 提供〉は、自分の就職活動の現状等を話す〈事実説明〉、応答者の応答や、就職活動に関する自分の見解や評価をする〈見解表明〉、〈評価表明〉である。〈V. 受容〉は、母語話者同様、〈継続〉、〈承認〉は多いものの、〈興味〉や〈共感〉が少ない。つまり、学習者は、応答者の発話への関わり方が希薄な談話展開をとる傾向があると言える。

4.2 談話構造

談話は、「大話段」と「話段」の2次元に分けることができる。「大話段」は、「Ⅰ. 開始部」、「Ⅱ. 展開部」、「Ⅲ. 終了部」の3種に分けられる。「Ⅰ. 開始部」では、質問者と応答者が挨拶し、「Ⅱ. 展開部」で相談を展開する。最後に、「Ⅲ. 終了部」で終了の挨拶をして談話が終了する。

「話段」は、発話機能の組み合わせと質問の内容から区分した。以下、表5に応答者の評価が高かった母語場面【資料4】の談話構造を、表6に評価が低かった接触場面【資料10】の談話構造を示す。同様に、全16資料の談話構造も明らかにした。「話段」の欄は、左から発話番号と参加者のイニシャル、()の中は、話段中の発話数、話段の内容のタイトルである。

母語場面と接触場面は、「Ⅰ. 開始部」、「Ⅱ. 展開部」、「Ⅲ. 終了部」の3つの大話段があり、提出順も共通していた。母語場面と接触場面の「Ⅱ. 展開部」の「話段」の数は、応答者Fの母語場面の【資料1】は11話段、【資料2】は7話段、【資料3】は11話段、【資料4】は8話段、応答者Nの母語場面の【資料5】は7話段、【資料6】は3話段、【資料7】は8話段、【資料8】は5話段である。一方、接触場面は、応答者Fの【資料9】は12話段、【資料10】は13話段、【資料11】は13話段、【資料12】は13話段で、応答者Nの【資料13】は6話段、【資料14】は10話段、【資料15】は9話段、【資料16】は9話段ある。応答者Fと応答者Nの話段数に違いはあるものの、接触場面の談話の方が、話段数が多いことが分かる。また、1話段の発話数は、接触場面のほうが少ない。つまり、母語話者の質問者は、1話題で発話を重ねて掘り下げるような談話の展開方法を取るのに対し、学習者の質問者は、多くの話題を提示し、それに対応する応答を収集する「質問-応答」を繰り返すような談話展開をしている。

表5、表6の「話段」の欄の発話者を示すアルファベット記号がないものは、沈黙を表すが、学習者の場合は「話段」が沈黙で終わる例が多数観察できる。質問者が沈黙をし、その後、応答者から「なんでも聞いてください。」や「もしぜひ聞きたいことがあれば。」という発話からなる「〈沈黙/フィラー+応答者からの単独行為要求/確認要求〉の話段」は、接触場面全8資料のうち、5資料に見られた。このことから、接触場面では、会話が途中で止まり、スムーズに進行しない場面があることが分かる。その際、母語話者の応答者が発話権を取り、話題を提供し、会話を進行している。これは、先行研究の佐々木(1998:125)の「異文化間コミュニケーションの場面では、日本人が『インタビュー・スタイル』をとる顕著な傾向」という結果と同様である。

表5 母語場面【資料4】の談話構造

| 大話段 | 話段 | |
|----------|---|---|
| I. 開始部 | 1K-9K (8) | 1. 開始の挨拶 |
| II. 展開部 | 10K-26F (30) 27K-105F (79) 106K-202K (97) 203K-272K (70) 272K-362 (91) 363K-385 (23) 386K-453F (68) 454K-518K (65) | 1. 内定先 2. 落ち込んだ時の対処法 3. 企業を選ぶときの軸 4. エントリーの数、時期 5. OB・OG 訪問 6. テスト勉強の有無 7. 活動を通してのよかったところと反省点 8. 情報収集の方法 |
| III. 終了部 | 519F-526K (8) | 1. 終了の挨拶 |

(注)「K」=質問者 NS4、「F」=応答者

表6 接触場面【資料10】の談話構造

| 大話段 | 話段 | |
|----------|---|---|
| I. 開始部 | 1F-10H (10) | 1. 開始の挨拶 |
| II. 展開部 | 11H-35 (25) 36H-93 (58) 94H-107 (14) 108H-135 (28) 136H-171 (36) 171H-193 (23) 194F-195 (2) 196H-220 (25) 221H-259 (39) 260H-289 (30) 290H-346F (57) 347-350F (4) 351H-376 (26) | 1. エントリーした数と受かった数 2. 活動を始めた時期 3. 活動中のサークルやアルバイト 4. エントリーシートの自分だけの特色 5. SPI の準備 6. 企業研究の仕方 7. 〈沈黙+応答者からの単独行為要求〉 8. 説明会の参加の仕方 9. SPI の勉強方法 10. 面接の仕方 11. 内定した企業 12. 〈沈黙+応答者からの単独行為要求〉 13. 面接が不安 |
| III. 終了部 | 377F-383F (7) | 1. 終了の挨拶 |

(注)「H」=質問者 NNS2、「F」=応答者

次に、発話例とともに、談話構造を分析する。(例1)に母語場面の発話例を、(例2)に接触場面の発話例を挙げる。左から、話段の番号、発話番号、発話者のアルファベット、発話例である。

(例 1) 母語場面の発話例 (「【資料 4】 質問者 K (NS4)、応答者 F)

- 5 272 K OB 訪問とか OG 訪問とかっていうのはどのぐらい／／しましたか？
 273 F =行きたかったんで、 僕は最初、商社に／／すごい
 274 K はい。
 275 F 商社に OB 訪問したんで、
 276 K はい。
 277 F だいたい 10 人ぐらい／／したんですけど。
 278 K あ――。
 279 K そんなにしたんですね。
 280 F OB 訪問はしても、しなくても、どっちでも。
 281 K いいん／／ですかね――。
 282 F いいと思います。
 283 K あ――。
 284 F メーカーは 1 人もしなかったし、
 285 F うちの会社、の OB、特に、メーカーは／／ OB 訪問やってませんってところが結
 =構多いので、
 286 K はい。
 287 K ふーん。
 288 F その、不公平／／とかになっちゃうので、
 289 K はい。
 290 F 「やってません」っていうと結構。
 291 K そ――なんですか。
 292 F あんまり関係ないですね。
 293 K ふーん。
 294 K 商社とかっていうのは？ (関係ないんですか。)
 295 F 商社は、その何にしたから、どうこう／／っていうのじゃなくて、
 296 K はい。
 297 F その、やっぱり、あの、商社ってどの／／会社も結構同じような仕事を／／してる
 =ので、
 298 K うんうん。
 299 K はいは
 =い。
 300 F その、「なんでうちの会社にしたの」って聞かれた／／時に、
 301 K はい。
 302 F やっぱ、一つ言えることは、そ、「その社風が／／私に合ってるからです」って、
 303 K うん。
 304 K 言え／／る、言える。
 305 F っていうのが／／結構みんな言うんですね。
 306 K あ――。
 307 F その雰囲気を知るために、
 308 F その、色んな働いてる社員の人に／／会って、

- 309 K なるほど、なるほど。
- 310 F 違いを見つけるってのが OB 訪問なんだと思うんです。
- 311 K なるほど。
- 312 K あ——、わかりました。
- 313 K じゃ、あんま、選考には関係ないけど、
- 314 F 全然関係ないです。
- 315 K 情報収集のためっていう//感じですね。
- 316 F そうですね。
- 317 F 僕は、あと、OB 訪問する時//には、
- 318 K はい。
- 319 F エントリーシート//を添削して//もらってましたね。
- 320 K はい。
- 321 K あ————、なるほど。
- 322 — [沈黙 2 秒]
- 323 K キャリアセンターとかって活用してました？
- 324 F キャリアセンターは一、あの一、僕は、あの、OB 名簿//を見るぐらいしか//
=使ってなかったですね。
- 325 K あ、はい。
- 326 K =一、なるほどなるほど。 あ
- 327 K う——ん。
- 328 — [沈黙 2 秒]
- 329 K OBOG 訪問した時ってのは、結構人のコネとかっていうのをよく聞くんですけど。
- 330 F いや、僕は//先輩、全然いなかったので、
- 331 K キャリア
- 332 K キャリアセンター、
- 333 F 名簿見て、
- 334 K あ。
- 335 F 「A 大学の」//電話して、
- 336 K {笑い} 電話して、あ——。
- 337 F 頑張りました。
- 338 K あ——、{笑い} 大変でしたねー。
- 339 F すごい緊張します。

(例 2) 接触場面の発話例 (「【資料 11】 質問者 B (NNS3)、応答者 F)

- | | | | |
|---|----|---|----------------------------------|
| 2 | 83 | B | ふ——ん。 |
| 3 | 84 | B | あと、受けた会社の中で 1 番記憶に残る会社、は//どこですか。 |
| | 85 | F | 1 番、 |
| | 86 | B | 面接とかセミナーとか//行って一、 |
| | 87 | F | う——ん。 |
| | 88 | B | 他の会社とは違うなと思う//会社とか。 |

- 89 F う————ん。
- 90 F そうですね、ま、僕の内定先／／の会社は一、
- 91 B はい。
- 92 F やっぱりその面接を通して、
- 93 F その、やっぱり社員の人達、すごいいい人ばかりだったので、
- 94 F やっぱり1番いいなって思ったからこそ、
- 95 F あの——、内定／／いただいたんですけど、
- 96 B うん。
- 97 B はい。
- 98 F 逆に、なんか、悪い意味で印象に／／残ってるのは一、
- 99 B はい。
- 100 F あの——、商社の／／会社で一、
- 101 B あー、はい、はい。
- 102 F 僕、商社2つ、実は最終面接で／／、最終面接までいったんですけど、
- 103 B はい。
- 104 B はい。
- 105 F 両方最終面接落とされて、
- 106 B はい。
- 107 F それはちょっと精神的にきつかったですね。
- 108 F 最終面接まで行ったら一、
- 109 B はい。
- 110 F もういけるでしょ、
- 111 B あー／／一、はい、はい、はい。
- 112 F 内定出るでしょって思ってたけど、
- 113 F 落とされたみたいなの。
- 114 — [沈黙2秒]
-
- 4 115 B 多分言われたのが一、
- 116 B しょうひんメーカーから内定をもらったと言われたん／／ですけど、
- 117 F はい。
- 118 B しょうひんメーカーを選んだ理由って、なんですか？
- 119 F 食品ですね。
- 120 B あ、食品。
- 121 F 食品はそうですね一、
- 122 F 基本的に、僕、食べるの好き／／なんで、
- 123 B あー、はい {笑い}。
- 124 F それが一、まず／／1番大きなことと、
- 125 B はい。
- 126 F あと、僕の会社はすごい海外に、食品メーカーの中で1番海外展開／／してるんで
=すね。
- 127 B う——
=ん。

- 128 B うん。
- 129 F で、僕の就職活動の軸っていうのが、
- 130 F まず海外絶対行きたいなって思って//たのでー、
- 131 B あー、//はい。
- 132 F だから、商社とかも受けて//
- =たんですけど、
- 133 B ーー。 あ
- 134 F やっぱりその、海外に行けるっていう点と、
- 135 F ま、しょ、食べるの好きだし、
- 136 B あー。
- 137 F で、やっぱ、あと、合ってた。
- 138 F 社員の人達がすごいいい人達だったので、
- 139 B うん。
- 140 F 選びましたね。
-
- 5 141 B はい、最後の質問です。
- 142 F はい。
- 143 B 面接の準備とかー、エントリーシートの準備とか、
- 144 B どーのーようにやったんですかー？
- 145 F そうですね、まずエントリーシートの準備から言うと、
- 146 F えっとー、ま、エントリーシートで聞かれることって
- 147 F だいたい結構決まってて、
- 148 B はい。
- 149 F 会社の志望理由とー、あと、学生時代頑張ったこと。

以上の(例1)、(例2)は、母語場面と接触場面の典型的な談話展開の例であり、他の母語場面と接触場面の資料にも同じような談話展開が観察された。(例1)の母語話者の発話数と(例2)学習者の発話数は、ほぼ同等であるが、母語話者の話段数は1話段に対し、学習者の話段は4話段と話題が多岐に渡る。これは、前述した通りの結果である。

次に質問者の発話例に注目する。母語話者は、1つの話題に関連した質問を重ねたり、応答に対して「応答確認」((例1) 313K、315K)や〈V. 受容〉の〈興味〉((例1) 278K、306K、321K)、〈共感〉((例1) 338K)や〈IV. 提供〉((例1) 279K、304K、312K、338K)を用いた発話で、「感想」、「共感」を示す発話をするなどして、積極的に話に参加している。そのため、「質問ー応答」の単純なやりとりだけでなく、「質問ー応答ー反応」や「質問1ー応答1ー反応1＋質問2…」のように、一つの話題において、応答に関連した質問を重ねるなどの発展した発話のやりとりをしており、質問と応答者の双方向のやりとりから談話が形成されている。母語話者の談話は、1話段の「質問1ー応答1」の中に小規模の「質問1.1ー応答1.1」が含まれており、大小の話段からなる多重構造が存在するのである。

一方、学習者は、ある話題 1 の「質問 1-応答 1」から、別の話題 2 の「質問 2-応答 2」というように、質問者の「質問」と応答者の「応答」の発話連鎖から形成される談話構造で、「応答」から発展した発話のやりとりや、「応答」に対する「応答確認」や「感想」、「共感」等を示す反応が少ないという傾向が認められた。

従って、日本語母語話者と韓国語母語話者で、情報収集の談話構造には違いが認められ、異なる談話展開の方法があるといえる。これは、高木（2013）の日本語母語話者は「共有型」、韓国語話者は「要求型」の談話展開をするという指摘と同様の結果である。高木（2013）は、韓国語母語話者の韓国語の自由会話を分析した結果だが、本研究では、この母語の談話展開の特徴が、日本語の会話にも影響したということが明らかとなった。

フォローアップインタビューでは、応答者が、「韓国語母語話者は、1 回質問をしたらそこからの展開が短く、次の質問に行く傾向がある」や、「日本語母語話者は、前置きというか、入口の質問があって、その質問で話題を広げたら、広げた話題で質問して、次の話題に進んでいくやり方が多かった」という印象を述べている。一方、「日本語母語話者の方が話の流れがあり、予測ができるため答えやすかった」、「韓国語母語話者は話題が変わるため予測ができなくて難しかった」、「唐突に話題転換がされた」と指摘していた。以上のことから、母語話者は、1 つの話題において発話を重ねて掘り下げる談話の展開方法を取るのに対し、韓国人日本語学習者の質問者は、質問をするという役割に重きを置き、応答者との相互作用が希薄な談話展開になる傾向があると言える。

5. 考察と今後の課題

本研究では、母語場面と接触場面における大学生と留学生による就職活動の相談の談話を分析対象に、参加者の発話機能の用いられ方と談話構造を分析した。その結果、母語話者と学習者の質問者には、共通点と相違点があることが明らかになった。発話機能の用いられ方は、学習者の質問者は、主に発話機能の〈Ⅲ. 要求〉の発話を用いて情報収集をするのに対し、母語話者は、〈Ⅲ. 要求〉以外に〈Ⅳ. 提供〉や〈Ⅴ. 受容〉で情報提供や反応をして情報収集をすることが明らかになった。また、談話構造は、「大話段」の数と提出順は共通しているが、「話段」の出現数と提出順は異なる。母語話者は、「質問-応答-反応」や「質問 1-応答 1-反応 1+質問 2…」のように、一つの話題において、応答に関連する質問を重ねて発展するやりとりをしており、質問者と応答者の相互作用により、談話が展開されている。1 話段中の「質問-応答」に、小規模の「質問-応答」が含まれ、大小の話段からなる多重構造が展開している。それに対し、韓国人日本語学習者は、「質問-応答」が多く、話段数が多い。1 話段中に「質問-応答」の小話段が少なく、質問者の「質問」と応答者の「応答」の単一の発話連鎖から形成される話段が多いことが明らかになった。また、母語話者は、1 つの話題において発話を重ねて掘り下げる談話展開の方法により、〈Ⅴ e. 興味〉、〈Ⅴ f. 共感〉で反応し、〈Ⅳ. 提供〉や共通話題を提示しながら、相互作用の顕著

な談話展開をしている。一方、学習者は、主に〈Ⅲ. 要求〉の表現で、多くの話題提示をし、それに対応する応答を収集する「質問-応答」を繰り返すような談話展開の方法を取り、応答への反応や〈Ⅳ. 提供〉が少なく、相互作用が希薄な傾向がある。

日本語の会話教育では、応答者との相互作用を意識した談話の展開方法や、話段のまとまりを意識させる談話の展開方法を指導する必要がある。具体的には、〈Ⅲ. 要求〉系のみならず、〈Ⅳ. 提供〉や〈Ⅴ. 受容〉を用いた発話で、応答者の発話に積極的に関わり合う談話の展開方法を指導する。また、学習者の発話には、〈Ⅱ. 談話表示〉も少なかったため、話題の進行や話題転換の仕方も学習項目に取り入れたほうがよいと考える。

今後は、談話資料を充実させ、質問者と応答者との相互作用による情報収集の談話の展開方法をより精密に解明したい。また、多様な情報収集の談話の分析を重ね、分析結果を日本語教育へ応用させたいと考えている。

注

- 1) 以下、母語話者とする。
- 2) 以下、学習者とする。
- 3) 応答者2名の内、応答者Fは食品メーカーに内定しており、応答者Nは総合商社に内定をしている大学4年生である。
- 4) 調査を実施するにあたり、2012年11月3日に早稲田大学大学院日本語教育研究科に研究調査倫理審査申請書を提出し、同年11月29日に承認された。
- 5) チェックリストの項目は、「質問」、「聞き手」、「進行」の3構成になっており、全11項目が設けられている。
- 6) 談話は調査協力者の許可を得て、録音、録画をした。収集した談話は、ザトラウスキー(1993)と鈴木(2007)の文字化の規則を参考に文字化した。

*本稿は、早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法——韓国人日本語学習者の会話教育の提案——』の一部を加筆、修正したものです。

【参考文献】

- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 梅木俊輔(2009)「ターン管理と発話連鎖への期待に関する一考察——韓日接触場面における情報要求場面を中心に——」『言語科学論集』13、71-82.
- 小林友美(2015)「韓国の大学におけるビジターセッションと会話分析を取り入れた授業——実践報告と学習者の意識変化」『日語日文学』67、99-114.
- 小林友美(2017)『日本語教育のための情報収集の談話の展開方法——韓国人日本語学習者の会話教育の提案——』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準(1)——提題表現の統括——」『文藝・言語研究言語篇』

11、89-135.

- 佐久間まゆみ（2002）「3. 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則共著『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店 pp.119-189.
- 佐久間まゆみ（2003）「第 5 章 文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp.91-119.
- 佐々木由美（1998）「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話——同文化内および異文化間コミュニケーションの場面」『異文化間問題教育』12、110-127.
- 鈴木香子（2003）『発話機能に基づく日本語の相談の談話の構造分析』早稲田大学大学院日本語教育修士論文（未公開）
- 鈴木香子（2009）『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』早稲田大学モノグラフ 11a 早稲田大学出版部
- 高木丈也（2013）「日本語と韓国語の自然談話に現れる『くり返し発話』」『待遇コミュニケーション研究』10、52-67.
- 中井陽子（2003）「話題開始部で用いられる質問表現——日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2、37-54.
- ポリー・ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 横須賀柳子（2000）「情報取りにおける聞き手のストラテジー」『ICU 日本語教育センター紀要』10、41-57.

